

平成十六年八月八日

『福田恆存を読む会』発表

吉野櫻雲

《第一発表文》 【福田恆存の基調音「二元論」：その評論的展開を追ふ】

ダイナミズムとは、二元的緊張から発生するのでは・・・。

そして、「自己欺瞞」とは、その緊張退却から発生するものなのでは・・・。

「生か、死か、それが疑問だ、どちらが男らしい生き方か、じつと身を伏せ、不法な運命の矢弾を堪へ忍ぶのと、それとも剣をとつて、押しよせる苦難に立ち向ひ、とどめを刺すまであとには引かぬのと、一体どちらが・・・」

これはいはゆる俗論で言ふ『優柔不断のハムレット的悩み』なんかではない。生死の両極に追ひやる仮説的能動性が齎す精神のダイナミズムである。行動へのスプリングボード、叱咤。言葉のもう一つの側面。（氏の主張：「ハムレット劇にある躍動感」の要約）

福田評論、そのダイナミズムの淵源を訪ねれば、そこには「二元論」の展開がある。

論評展開工程：→《第二発表文》『近代の宿命』西欧歴史→ルネサンス（質疑）→西欧近代（別紙甲図）（質疑）→日本非近代（別紙乙図）との比較：甲乙の相異を認識せぬが為の「近代適応異常」→逃避せずに非近代に堪へた乃木将軍：旅順攻略戦→西欧十九世紀文学（質疑）→鴎外・漱石の文学（真正近代人：反私小説＝非自己欺瞞）（質疑）→日本「非近代」文学→自己欺瞞（私小説：『現代人の救ひといふこと』他から）→そして《第一発表文》以下の基調音「二元論」の展開と「自己欺瞞」概欄へ

更に出来れば重要テーマ：『精神・時間・全体』の関連性・・・「精神は全体を掴む時、時間は静止してゐる」。ならば時間を静止せしめた時、全体が芸術的瞬間が。これは難しいがやはり氏の、探求すべきテーマだと思ふ（以下備考欄及び下欄文参照）

1. 【まずは、《第二発表文》『近代の宿命』から、その序文より】

・・・『近代の宿命』では、「二元論」をどのように展開していったか。

「ぼくたちはなによりもいま自分たちの立つてゐる足場を理解しなければならず、それを理解しようとするれば、いきほひヨーロッパの近代がその解明を要求してくる」。そして、

「明治以来の近代日本文学にとって古典となつた十九世紀末葉のヨーロッパ文学に源泉を訪ねようとするところみが、おのずとルネサンス以後の近代ヨーロッパ精神史へと僕の関心をそそつた」

それを、恆存は別紙の如き「二元論」的展開で論究していった。

・・・別紙参照 ⇒ 《第二発表文》へ。

参照：近代西欧精神とは何か・・・「神に型どれる人間の概念の探求」(『現代人の救ひといふこと』から)

## 2. 《その他評論：二元論の展開と「自己欺瞞」の問題》

《以下、論考に際しての分類及び略号化》・・・恆存の「二元論」的捉へ方。

「支配＝被支配の自己」・集団的自我・「九十九匹」・実生活・政治・・・A

神に従属する自己・個人の純粋性・個人的自我・「一匹」・芸術・文学・・・B

全体・絶対・神・・・C

自己完成・自己全体化・自己主人公化・個人主義化・・・C''

宿命・神意・天命・秩序・文化・・・D1

信仰・自己劇化・演戯・自由意志・自己主張・・・D2

実在感・必然感・全体感・生き甲斐・充実感・・・D3

(別構図参照)

甲：『近代十九世紀の構図』 乙：『非近代日本の構図』

上記の二元的基調音が以下作品にて、委曲を尽くすかの如く奏でられていく

《恆存評論：基調音「二元論」の展開と「自己欺瞞」の問題》

\*以下、『作品のリアリティーについて』迄は、概ね《第二発表文》にて説明済み。

作品	執筆・発刊年月 年号は全て昭和	二元論の展開	自己欺瞞の問題 ：二元論からの 退却・・・ (A問題をBに 潜り込ませる)	備考
ロレンス 『アポカリプス (黙示録)』から	二十二年五月	「集団的自我 A と個人的自我 B」	「弱者の歪曲さ れた優越意思」	恆存の「二元論」 「自己欺瞞」発 生の原点。
『近代の宿命』  別パンフ『近代 の宿命』から 参照	二十二年十一月 発刊	(A)「支配＝被 支配の自己」と  (B)神に従属す る自己・個人の 純粋性。その領		「絶対者(C)の ないところに歴 史はありえない のである。統一 性と一貫性との

		域 (A) 拡大の変遷。＝「カエサル」の事はカエサルに聞け」		意識が人間の生活に歴史を付与する。(即ち構図「甲」の変遷) (全二 P460) : 括弧内は吉野挿入
『現代人の救ひといふこと』	二十二年執筆	政治 (A : 支配＝被支配の自己) と B (文学・芸術・宗教)	「近代日本にあつては、文学 (B) すらも文明開化の出世主義 (A) のネガティブな吐け口に」。	別紙 (乙図) 参照 : 吐け口として救ひを求めた精神主義 (B 主義) 的構図
『近代日本文学の系譜』 ↓ (乙 : 『非近代日本の構図』)	二十年十二月～二十二年九月	実行 (A・生活・社会) と芸術 (B)	「多くの作家達は生活の場 (A) で解決すべき問題を芸術 (B) のなかにもちこんだ」	(乙図) 参照 : 「自然主義」、彼我 (西欧・日本) の差。↓との比較を。
『小説の運命』 西欧リアリズム小説 (フローベール) ↓ (甲 : 『近代十九世紀の構図』)	二十二年三月執筆 (Ⅱ)	個人の純粋性 (個人的自我) / 集団的自我 (社会)。 フローベール文学の「西欧近代構図」との一致 : (甲) 図参照 下欄作家別参照	「19世紀の個人主義的リアリズム」による自我の否定にさらされながらも、「つひに否定し扼殺しきれない個人の純粋性 (B) を発見することを念じて」みた。 →右へ続く。	「かれらの夢想してゐた自我の内容の高さと深さにと想ひいたらねばならず、その背景に発見されるものは神 (C)」
『文学史観の是正』反自然主義 (主に漱石と鴎外について)	二十四年七月 全二 : P348	実行 (A・生活・社会) と芸術 (B) との峻別。「鴎外・漱石の作品	自己欺瞞の徹底回避 : 「鴎外の目標はつねに一貫して	精神は時間の束縛から離れ「はるか上空に伸び上がる事によつ

		は <b>乾燥せる上空C</b> （全体＝精神）をまさぐる知性の文学」→備考	をり、そこには陰に陽にヨーロッパ流の近代的な文学概念を日本に移植することがめざされてゐた」と。そして漱石も）：別パンフ『『近代の宿命』から』参照	て、広大な勢力圏（ <b>全体：C</b> ）を獲得しうる」
漱石と鷗外 『自己劇化と告白』	二十七年十二月	上記に続く。「かれらは封建道德の背後に道德（ <b>C</b> ）そのものを見てゐた」 ~~~~~ 旧規範（旧限定）に晒されたまま、私小説家のやうには集团的自我 <b>A</b> から逃げず、→右へ	しかも無限定性の自己になつた明治の状況に堪へ、そこになんとか新限定（「道德そのもの」に通じるもの）を表現せしめやうとした。＝「何を敵とするかによつて自己は表現せられる」	西欧十九世紀文学（リアリズム）を理解してゐた。
『絶対者の役割』		<b>精神とは人間（部分AB）が内部に持つ「全体C」の観念</b>		
『フィクションといふ事』 全六：P454 フィクション＝仮説 <b>C</b>		<b>全対Cと部分。</b> 「相手の自惚鏡・独り合点」に附合わない <b>個人主義（自己主人公化C）</b> が招く自己正当化・自己満足化＝ <b>似非D3</b> （実在感）の特徴。	自分が自分に対して誠実と言ふ自己欺瞞。幾らでも嘘が可能＝ <b>個人主義の弊害。</b> 「誠実とは本来対他概念」「芝居（仮説 <b>C</b> ）に対して誠実に」	独り合点＝チェーホフ劇では描かれてゐると。チェーホフは「口辺に笑ひを浮かべ」それを描き、フロベールの如く夢想を仕舞込んでゐたといふ事か？。

『独断的な、余りに独断的な』 (私小説＝芸術家小説批判) 全六：p559	四十九年～五十年	実行(A・生活・社会)の不满を芸術(B)へ逃げ込む。 私小説家の「多くの作家達は生活の場で解決すべき問題を芸術のなかにもちこんだ」と同。	「忠実、誠実是对他的な概念であり、自己を超えたものに対するものでなければ、それが果たして忠実であるか否かの判定の基準は何処にも求められない。 →右へつづく	自分以外にそれを判定するものが存在しない以上、何をしても自己欺瞞の逃げ道があり、自己即芸術家(B)になる為に書く事が最も自己に忠実であるといふことになる」
『一匹と九十九匹と』	二十一年十一月	政治(九十九匹・集団的自我)と文学(一匹・個人的自我)との峻別＝「カエサル」の事はカエサルに聞け」	「大通り(九十九匹)の通行禁止にあつてみれば、裏口(一匹)にまわるよりほかに手はなかつた」	＝ルサンチマン・怨念(ニーチェ) 「弱者の歪曲された優越意思」(ロレンス)
『国運』 乃木将軍について  参照：『乃木将軍と旅順攻略戦』	(全集第一卷) 十九年五月(三十四歳)	時間的全体(C)と部分(現在)： 恆存は点(現在)に迫り静止した時、過去・未来と言ふ時間的前後の「暗黒化」によつて、その間の時間を光(全体：C)として感じ」た。「僕達が静止する時に登場するものが精神(＝全体)」 (『近代の宿命』序文)	自己欺瞞の不在(非近代日本の構図参照)：「乃木将軍は逃げ道を見いだせぬまま、ひたすら時間の経過をまつよりほかに方法をしらない。その男の運命(C?)が顔を覗かせるのはこの瞬間である」	乃木将軍はその乃木将軍は場(非近代日本の構図)に堪へた。 「将軍は己の不幸をそれと知らず、頑なにじつと堪へてゐたのである。自己の苦しみを方法論で解決することを知らぬ愚かさであり、馬鹿正直さである」
『作品のリアリティーについて』	二十二年八月 (全二：P266)	実証精神＝Aの客体化(正しく	現実を正しく認識しようとい	「現実のうちに正しく生きよう

て』		認識)と <b>B 個人</b> の <b>純粋性</b> (「現実のうちに正しく生きよう」=「神 <b>C</b> の回復)」と言ふ問題。	ふ、実証主義或は実証精神 ( <b>A</b> 的客体化) は、その手段の徹底化のあまり、→右へ続く	<b>BC</b> 』といふ人間の内にある素朴なる欲求(目的)を無視し、そこからかけ離れてしまった。
『日本及び日本人』 ・・・西欧を異質のものとしてとらへ位置づけること。 →発展的論究は覚書(全六)参照「完成せる統一体としての人格」	二十九年八月～三十年十一月	個人主義(甲図)ではなく、「宿命( <b>D1</b> )／自己劇化( <b>D2</b> ) =真の自由(実在感) <b>D3</b> 」による無限定性の自己(自我喪失?)からの脱出。 即ち「関係の真実を生かす。 →完成せる統一体としての人格」(別図参照)それを日本人の個人主義の成立とみなす。 →備考		日本人の <b>個人主義の成立</b> ・・・彼我の距離の認識。西欧を追いつけるものとして眺めることは間違い。まず異質のものとしてとらへ位置づけること、さうすることによつて、「日本及び日本人」の独立が可能。それを日本人の個人主義の成立とみなす。「日本及び日本人」 p 55 上)
『人間・この劇的なもの』	三十年七月～三十一年五月	宿命と自由(自己劇化による):全体( <b>C</b> :時間的)と部分。 下欄参照		精神:時間の停止:全体把握:芸術の問題  下欄参照
演劇関係(『せりふと動き』・		上記文参照。 宿命 <b>D1</b> と自由(自己劇化 <b>D2</b> ):全体(時間的)と部分。 そして全体感・	自己欺瞞・自己満足に陥らない為の語法=フレイジング=対象との適応正常化方法論	上記文参照。 及び、「関係( <b>D1</b> )を形ある物にして見せる(言葉の自己所有化:適応正常

		実在感 D3		化)」
『醒めて踊れ』	五十一年三月	C(主題)→D1(心の動き：関係)を言葉の自己所有化(適応正常化)での確に掴む	自己欺瞞・自己満足に陥らない為の言葉の自己所有化＝適応正常化	上記文参照。 観念（言葉）の背後にある関係＝何故を的確に捉える事。
講演テープ 『日本の近代化とその自立』 —「処世術から宗教まで」—	五十一年三月	実証精神＝A の客体化と B 個人の純粋性と言ふ問題。 自己欺瞞・自己満足に陥らない為の語法＝ So called＝対象との適応正常化方法論	自己欺瞞に陥らない為に必要なものは、「処世術＝A のものは A で解決」 「処世術」＝「精神の政治学」？ ——→備考	「精神の政治学とは個人の純粋性と『支配＝被支配の自己』とのあひだに、それぞれの個性に応じた均衡を企てるもの
近代知識人の代表：清水幾太郎	割愛		乙図代表	

作家	発刊年月	二元論の展開	自己欺瞞内容	備考
D・H ロレンス キリスト教精神主義批判「肉体も思考する」		「集団的自我 A と個人的自我 B」	「弱者の歪曲された優越意思」 (A 問題を B に潜り込ませる)	『アポカリプス(黙示録)』から
ニーチェ		超人：絶対 (C) と相対。 彼等の「その背景に発見されるものは神」	キリスト教批判＝ルサンチマン (怨念) に対する糾弾。	『権力への意志』他
フローベール 「作品を合理と必然との綱目(A 実証化)にぬりこめてしまつ	(『小説の運命 II』) 二十二年三月	「フロベールほど激しい夢想家 BC はゐない。その為自分を知つてゐる彼はあまり気がひけるの	「素朴な読者は、しかし、ドン・キホーテとサンチョとを並列してくれなければ笑ふすべを	フローベールの「その背景に発見されるものは神 (C)」

た」  以下比較参照		でサンチョ (A) ばかりの世界を描きドンキホーテ (B) を隠してしまつた」→右	知らず、しかたなく人生訓を抽出して気をよくしてゐるといふしまつた」	
セルバンテス (ルネサンス人。シェークスピアと同年同日逝去)	(『小説の運命Ⅱ』) 二十二年三月	A: 従僕サンチョ (現実常識) と B: ドンキホーテ (騎士道 C=神の代用、ロマネスクな夢想) の対比		中世一神=ルネサンス (自由=宿命解除) 神の代用としての騎士道。
チャーホフ		構図としてはフローベールとの近似性(甲図)		彼の夢想 (C) が今一つ不明。「無執着=心的要素」か「肉体の健康性」か?
シェークスピア  中世一神=ルネサンス (自由=宿命解除)  自由=孤独・不安		宿命と自由。 「自由=孤独」の二律背反。 解放されて仕えるべきもの (神 C) を失つた自我の不安→自己全体化 (C')。 「ただ野心ばかりが跳びはねたがる」マクベス		個人主義 (神 C を失つた自我の不安) 限界の先取り。

#### 欄外重要テーマ:『精神・時間・全体(時間的)・芸術』の関連性

《「精神は何時、どこでも時間のそとに静止することができる。(中略) 時間が静止する時に登場するものが精神 (全体) なのである」(『近代の宿命』序文)》

精神は「時間のそとに静止することができる」とは、どう言ふ事か。又はどうしたらそれが出来るか。これも重要な恒存の残した命題である。

——この点についての質疑応答——以下を参照にして



『人間・この劇的なもの』・『近代の宿命』序文、から・・・

「僕達が静止する時に登場するものが精神」。そしてその時精神は全体を感得している、と恆存は言ふ。

ならば、逆に前後の時間を暗黒化せしめて、時間を静止すれば精神は全体の把握が可能となるのでは。→演劇における全体感 D3 の獲得(即ち芸術)。

真の芸術は精神が其処で全体(時間的)を把握できてゐるといふ事では。(吉野感想)

『人間・この劇的なもの』から・・・

日常の時間的平面から「上に脱け出た意識は、足下の現実が時々刻々に動いてゐることを実感」「意識は、平面を横ばひする歴史(過去・現在・未来といふ時間的継続)といふものに垂直に交る」時、「部分(現在)を部分として明確にとらへることによつて、その中に全体(過去・現在・未来といふ時間的全体感)を実感」する。

精神は時間を静止する事が出来る。前後の時間(未来過去)を暗黒化し時間を静止して部分(現在・点)になり切る事が出来る。そしてその時、精神は全体を感得する。(芸術においても)と言ふ事か。

\*総合的に解釈すると、上記のやうに恆存は述べてゐる。

此処に、「時間・全体感(実在感＝芸術＝歴史の動き等)・精神」の密接なる関連性を、恆存は謳つてゐると小生は思へてならないのである。(未だ充分には把握できないもどかしさを感じつつ)

\*「203高地での氏の感慨」も、「精神が全体を把握するとき、そこには時間の静止がある」との関連を感じる・・・

即ち、時間の静止があつて全体(歴史の動き)を感得したのである。その時、恆存の意識は時間の平面的流れから上空へ脱け出て、その浮かび上がった意識は足下に全体(歴史)の動きを感じ取つたのでは。「運命が(乃木將軍の)肩越しにそつと乗り越してゆく。

(中略)將軍の運命とともに明治日本の国運が、遼東半島の先端を一過したのである」

P525『国運』と。

\*時間芸術についても同じ事が・・・前後を暗黒化し、意識を現在に垂直交叉し、時間を静止することが出来た時に精神は全体を把握する。＝演劇・・・では評論は小説は。(参照：『人間・この劇的なもの』から)

・・・以上から話を拵げると、

精神は現実の垣根(逆境・苦痛・相対)を超えて、即ち時間的平面を抜け出て上空へ浮かび上がり、全体・絶対(神の愛)を把握する事ができると言ふ事に繋がらないか。

イエスがゴルゴダの丘において、現実(受難)を精神の力によつて超える事ができた如く。('パッション')

イエスの精神は神の愛(絶対・全体)を感得する事が出来たその時、恆存の言葉をなぞればその時時間は静止してゐた、と言へるのであらう。

以上